

## プラトンの法理論

### マグネシアの国——その二

池 田 美 恵

牢獄にあって処刑の日を待っていたソクラテスは、何故友人たちのおそらく金の力で開かれた牢獄の門を通過して出てゆかなかったのでしょうか。亡命先も用意され、また亡命がそれほど異常なことともされなかった社会で、彼にとってただクリトンの申し出をうけいれさえすればよいという状況の下にあって、何故ソクラテスは自らの前に開かれた生への道を拒否したのか。それは彼が自分に与えられた死の判決の正当性を認めて罪に服したからではなかった。彼がおのれの無罪を確信し、自分が告発され、裁判において有罪の判決をうけるに至った真の理由は、多くの人びとの中傷と嫉妬によるものであると考えていたことは、『ソクラテスの弁明』(28A)に見られるとおりである。では、不当とする判決に服して逃亡を拒否したソクラテスの論理は、どのようなものであったのか。不正は不正を行なう者にとって害悪であり、醜悪である。何故なら、それはソクラテスがその世話を生涯の仕事とした魂にとって最大の悪であるから。この命題の真理性は、ひとがどのような不正を蒙ろうと、たとえそのために死に追いやられようと、何の変わりもない。この根本的な信念の上に立ってソクラテスは、たとえ不当な判決であっても、それが国の判決として下された以上はそれに従わないことが何故不正なのかを論じようとする。『クリトン』の最後の部分(36A~36D)における、擬人化された「国法」および「国家公共体」とソクラテスとの架空の対話において展開される論理がそれである。国家においていったん定められた判決が効力を持たず、個人の勝手によって無効にされるならば、その国家は覆されざるを得ない。何故なら、それはいったん下された判決は有効でなければならないという、国家の根本的法が葬り去られたことになるのだから。この故にソクラテスは、自分に下された判決が不当であることを確信しながら、判決に従って死んだのである。何となれば、国家は国民がそこで生まれ、養われ、教育された場であって、両

者のあいだには、親子のあいだにおけると同様に、対等の関係は存在しない。しかもソクラテスにとって、生まれた国の法律に不満なら、祖国を捨てて他国に移る自由も与えられていたのに、彼がそれをしなかったことは、彼が国法に服することを約束していることになる。このような事情の下においては、もし彼が国法が正当でないと思うならば、その旨国家を説得すべきである。それをしないで勝手に国法に背くことは契約違反ではないか。たとえソクラテスの行為がそれ自身どれほど高貴な感動的なものであるとしても、この架空の対話において示された逃亡拒否の論理は、われわれにとって充分な説得力を持つであろうか。そこにはかなりの論理的矛盾が見出だされるのではないか。たとえば、一方において国家と国民の関係は対等ではなく、国民は国家に対してその法に服する義務を負うとしながら、地方において国法の持つ強制力の根拠を契約 *convention* においているのは、明らかに矛盾と言わなければならない。正義の起元を契約におく一種の契約説を、プラトンは『国家』の中で (359 A) 正義を自己防衛の手段とする弱者の立場と関聯させてグラウコンに語らせているが、国法への服従という道徳的義務の根拠を契約におく見解は、その後プラトンの何処にも見出だされないように思う。このことはプラトン自身、国法の根拠を契約におく説を放棄したものとみなしてよいであろう。さらに架空の対話の最後に近い部分で、「国法」はもう一つの新しい論拠を提示する。すなわち、ソクラテスが不正な判決を受けたのは、国法によって害をうけたのではなく、世間の人間から害をうけたにとどまる。しかるに、もしソクラテスが法を犯して逃亡するならば、それは彼に不正をなした世間の人びとに対してではなく、国法そのものに対して害を加えることになるのである。法が悪いのではなく、法を運用する人間が法を誤って用いるのが悪いのだというこの論理は、法への服従を絶対的なものとする論拠となりうるものであろうか。誤って用いられた法はもはや法とは言えないのではないか。国家全体の公共の利益のために制定されているのではないような法は、まことの法ではない (『法律』715B<sup>(1)</sup>) のである。たしかに、プラトンの何処にも革命を正当化する論理は見出だされない。しかし徳が立法者の目指す唯一の目標であり、この唯一の目的追求の障害となるものは、何ひとつ、何ひとつともこれを選んではならない。究極的には国家といえどもこの例外ではあり得ない。祖国が隷属の輓の下に悪人どもの支配下にあることに甘んじるか、あるいは、国の逃亡かおのれが国を捨てて行くかの、いずれかを選ばざるを得ない事態に立ち至ったならば、われわれは徳のために国の逃亡を黙視するか、もしくは国を去るかの道を選ぶこともやむを得ない (710 D~E)。このように言い切るプラトンが、かりに齢八十才に近く『法律』執筆の最中に、ソクラテスと同じ理由で法廷に立たされることがあったならば、彼は『クリトン』におけるソクラテスの論理を繰返して、死の道を選んだであらうか。国外追放の刑を申しでて、彼の言う、嵐の

さなかに吹きつける砂塵や強雨を壁のかげに身をよせて避ける人の道を選ばなかったであろうか（『国家』496D）。

以上のような事情からして、法の問題はプラトンにとって、その生涯を通じてもっとも重要な関心事の一つであった。プラトンの哲学はソクラテス裁判の正当性を問うことに始まり、法についての理論的考察と、それにもとづく彼自身の法体系の草案を示した『法律』の執筆に終わっている。法なき人間は獣と変らず、法なき国家は国家ではないという、ギリシアの伝統的な法治国の信念と、裁判が政治的中傷と殺人の具となり、法の名の下にもっとも優れた、もっとも賢い、もっとも正しい人間が殺されたという事実とのあいだに立って、プラトンは法がいかにあるべきかを探究し、法の支配に伴うさまざまな問題点を指摘し、諸国の法についての豊かな知識と経験とを駆使して、法典のモデルをわれわれに残したのであった。このプラトンの法理論を、彼自身の言葉に即しながらできるだけ明らかにしたいというのが、本論文の意図するところである。

ここで問題とするのはプラトンの法理論であって、すなわち『ミノス』<sup>(2)</sup>の冒頭でソクラテスが問うている「法とは何か」「法を法たらしめている法の本质とは何か」に対するプラトンの考え方であって、『法律』において述べられている、具体的な諸法律についてはない。もちろんそれは、プラトンの法への関心が、法の本质、法の権威の根拠如何という理論的面にのみ向けられていて、実践面が軽視されていることを意味するものではない。法の分野に限らず、プラトン哲学は、しばしば誤解されているように、抽象の翼にのって概念の世界を飛翔するものではなく、現実に対する広く深い洞察と、示唆に富む具体的な改革の提言にその特色があることは、『国家』や『法律』を少し注意深く読む読者ならば、直ちに気づくところである。そしてこのプラトンの本領は、特に法律の分野において最高度に発揮されている。また法律の分野においては、その本来の性質から言って、実践が理論に優先するとまでは言わないとしても、理論に劣らず重要であることは否定できない。しかし具体的な諸法律に関する考察は、当時の歴史的事情との関聯においてなされなければならない。それは現状ではさまざまな資料的制約があり、また現在にある資料だけからみても、到底わたくしの手にあまる仕事として断念せざるを得ない。しかし彼の法理論は、必ずしも当時の諸事情に制約されることなしにそれを考察することが可能であり、しかもそれは法律に関する最初の理論的考察であるとともに、それが後世の法に与えた影響はまだ必ずしも十分に評価されているとはいえないし、さらにそのうちのあるものは、現代においてもなお新鮮な価値を持っているように思わ

れるから、敢えて此処に取りあげる。

プラトンの法理論について語る前に、先ずプラトンの法理論がそれとの対決において形成された相對主義的法理論、すなわち前五世紀のいわゆるノモスとピュシスの対立について一言しよう。この対立は、デモクリトスが感覺的世界はノモスにおいてのみあるとして、アトムと空虚からなるピュシスの世界をそれに対立させたように(DK. B9)自然哲学の領域にも適用されたが、それが大きな影響を与えたのは政治や道德の世界においてであった。法や道德が神的起元に由来し、父祖伝来の慣習と未分化であった状態から、法が国家の法として独立し、道德もまたその根柢を改めて問い直されるに至ったとき、それらが純粹に人為的なものとみなされるに至ったのは当然の成り行きであった。そして法が無秩序な暴力の支配に対して秩序を与えるために、人間の立法者によってつくられたものであるとする考えが、法や正義は強者の利益であるとするトランシュマコス説——この場合そのような法の持つ強制力は弱者の力如何にかかっている。すなわち彼らが法を覆すに足るだけ強力であれば、彼らは現行の法を変えるであろう——もしくは、法が弱者によって強者に嚮をはめるためにつくりだされた工夫であるとするカリクレス説——この場合にはそのような法律に縛られるか否かを決定するものは、強者の力如何ということになる。すなわち、彼らが充分強力であれば、彼らは法を無視して行動するであろう——をうむに至ったのもまた当然の成り行きであった。このような考え方は子供っぽい倫理説に対する現実主義の側からの鋭い批判として、何時の時代にも大きな説得力を持つことは確かであるが、法をもって単に人為的なものとする考え方は、道德や宗教の基礎を揺ぶり、遂には、人間は社会秩序を維持するために法をつくり、法をもって律しきれない部分を規制するために神神を導入したという、クリティアスのような考え方をうむに至る。(DK. B25)このような見解はそれが極く少数の人びとのあいだにとどまる限りは問題ではないが、それが大衆のものとなると、社会を根柢から揺り動かすのである。このような無神論や価値の相対化に伴う社会的危機に對しては、ソフィストがその責めを負わされがちであるが、その原因はむしろソフィストにその活躍の場を提供した、アテナイの精神的風土にあるのであって、ソフィストはその産物であり、彼らはただ社会通念を反映するものに過ぎなかった。もともと社会通念はつねに漠然として、はつきりした形をなさないものであり、ソフィストがそれに明確な形を与えることによって、このような時代の風潮を助長したことは確かである。プラトンの言葉を借りれば、大衆はソフィストを自分たちのライバルと考えているが、ソフィストの教えている内容は多数者の通念以外の

何ものでもないものであり、大衆こそ正に最大のソフィストなのである（『国家』493A）。

このノモスをもってピュシスに対立させる一般の風潮に抗して、ノモスをもってピュシスにおいて *κατα* あるもの（890D）とすることにによってこの対立に終止符を打ち、失われた法の權威をふたたび確立することが、プラトンに課せられた問題であった。人がいわゆるギュゲスの指輪（『国家』359D～360D）を持つとき、なおかつ法の權威を支えるもの、それこそがプラトンの求めたものであって、それがなければ、いかほど立派な法がつけられたとしても、法は結局力の問題になってしまう。あるいは法は抜け道を見つけるための法、法の網の目を巧みにくぐりぬけるテクニクを誇るための法（『国家』405B～C）となってしまう。

さて、法とは何かという問題を始めて自覚的に取りあげたという意味で、法哲学はプラトンに始まる。では、プラトンにおいて法とは何であるか。先ず『ミノス』を手がかりとして此の問いに対する解答を探ってみよう。『ミノス』では、法とは「評決されたもの」 *ψηφισμα* とか、「ポリスの議決したもの」 *δογμα πολιτικόν* とか、「ポリスの思いなしたもの」 *δοξα πολιτικη* とかいう規定が与えられる（『ミノス』314B～C）。ついで、法がドクサであるという規定がうけいられるとしても、法は悪しきドクサではなく、よきドクサでなければならず、よきドクサはまた真なるドクサであり、真なるドクサは真にあるものの発見であるから、法はポリスの統治に関して、真にあるものの発見 *τὸν ὀρθὸν ἐξισχύειν* であるということになる（『ミノス』314E～315A）。此处で法は、単に恣意的に人間によってつくられたものではなく、真にあるものの発見であるという定義が与えられる。しかし現実には、異った国々において、人は同じ事柄について相反する法を持ち、また同じ人びともときによりその法を変えろという事実を、どう説明したらよいのか。この点についてのプラトンの解答は、あるべき法と現実にある諸法律とを区別するところに成り立っている。何を美しいとし何を醜いとするかについて、また何を正しいとし何を不正とするかについて、人によって見解が異なるとしても、美しいものが美しいのであり、正しいものが正しいのであるということに変わりはないのであって、正が不正であったり、美が醜であったりすることはあり得ない。同様に、法は実在の発見であるが、人間はつねに実在を発見することができるとは限らない（『ミノス』315A～316B）。否むしろ、ポリスの議決したものとしての具体的な諸法律は、実在の発見としてのあるべき法に比べて、真実の模倣 *μίμημα τῆς ἀληθείας*（『政治家』300C）に過ぎないのである。このような意味で、プラトンの法理論は彼のイデア論の枠組の中に組みこまれるのであり、

『国家』におけるイデア論は晩年の『法律』においても決して失われてはいない。たしかに、『法律』において、イデアという言葉は一箇所(965C)しか出てこない。しかしこのことは、プラトンがイデア論を放棄したことを意味するものではない。雑多なるものから一なるイデアへ眼を向けての言葉どおり、プラトンは諸々の法律について語るとき、つねにそれらの法律がそれを志向しているところの一なるイデアに眼を向けているのである。この故に彼は、諸国家の法律がそのときどきの必要からつくられた法律の単なる集合に過ぎない現状を批判し、体系的法学の建設を意図したのである。今日の立法者は何かの必要に迫られると、その都度、たとえば相続についてとか、あるいは暴力行為についてとかいう風に、果てしない事柄について法律をつくってゆく(630E)。しかし法律はこのようにしてつくられてゆくべきものではない。殊に些細な事柄について、そのときどきの必要に応じて法律をつくったり変えたりしている人びとについて、プラトンは、それは生活態度そのものが悪いために病気をしているのに、その根本を改めようとしてないで、つぎつぎに新しい治療法にとびついていますますます病気を複雑にしてゆく病人のようなもので、このような法律の作成や改正はヒュドラの頭を切るようなものであると言う(『国家』425C~426B)。

プラトンが、法の体系的であるべきことを主張した最初の哲学者であるということは、決して彼が立法における経験的要素を軽視したことを意味するものではない。彼は、いわばユークリッドの原論のように、若干の原理から法体系を純粋に演繹的に導き出すことを意図していたわけではない。むしろ逆に、彼は立法における経験的要素を重視する。事実を重んじ、歴史の教訓に学び、諸外国の法律との比較検討をつねに怠らない。彼は立法者の仕事を、石を積み、家を建てる職人の仕事にたとえる。立法者はさまざまな経験的事実や歴史の教訓から手あたり次第に材料を集め、そのうちから自分がこれから建てようとする建物にふさわしいものを選び出すのである(858B)。

『法律』におけるクロノスの御代の神話は、この、イデア追求と現実への対応という、法の持つ二重性を語るものである。およそ人間の身で驕りや不正にみたされることなしに、人の世のすべてを統治し得る者は誰ひとりいないことを熟知したクロノスは、人の世の支配者として、人間ではなく、より神に近いダイモーンを与えたという(713C~714A)。この神話の意味するところは、今日もなおその真実性を失っていない。すなわち、神ではなく誰か死すべきものの支配する国は、どれ一つ不幸や労苦を逃れるすべはないのであって、この故に、われわれはあらゆる手段をつくして、クロノスの御代をまねるべきである。法とは死すべき人間の神を真似る営みである。われわれは知性の行なう規制を法と名づけて、公的にも私的にもわれわれの内にあって不死につながる知性に服しながら、国と家とを斉えなければならない。このようにプラトン

は法を知性の規制 *τὸ τοῦ νοῦ δέσποζον* であるとするが、同時に真正の知性は神のものであって、その知性が本当に真正であるような人間は、何処にも決して見出だされないと言うのである (875D)。

此処でプラトンの操り人形の比喩を振り返ってみよう。人間は心の中にある快楽や苦痛や、将来の快楽や苦痛を予想しての勇氣や恐れや、その他さまざまな情念の糸に操られて、あちらにひかれ、こちらにひかれる操り人形である。この人間を操る情念の鋼鉄の糸に交って、たった一本しなやかな黄金の糸がある。それはこれらの情念のどれが善くどれが悪いかを教える思考の糸である。この思考が国家の共通の意見となるとき、それは法と名づけられる。この思考という黄金の糸は柔かく情念の鋼鉄の糸のように力を用いて人間を強制するものではないから、それを助けるさまざまな補助手段が必要となる (641C~645B)。

この操り人形の比喩に見られる、法とは神に由来するものであるという考え方は、法の神的起元という父祖伝来の思想への単なる回帰を意味するものであろうか。別の箇所ではプラトンは立法者について、また次のように言っている。人間は誰ひとり、何ひとつ立法しはしない。むしろありとあらゆる偶然や禍いが、ありとあらゆる仕方では起こってきて、人の世の立法の一切を司っている。戦争や貧困や疫病や自然的災害が原因となって国制を覆し、法律を変える。人間のなす事柄はほとんどそのすべてが偶然による。神が万物を統べ、神とともに偶然と好機とが、人間のなす事柄の一切を支配している。しかし第三に、より穏やかな要素として技術があることを認めなければならない。嵐の際に舵取りの技術が好機と力をあわせるか否かによって、その得失は頗る大きい (709A~C)。この一見人間の無力の述懐とも見られる二つの言葉は、じつはプラトンの強烈な意志と自信とに裏づけられているのではないだろうか。天体の秩序ある運行と、人間社会の秩序としての法と、人間の魂の内部における道德的秩序とは、根柢において一であるという確信をもって、彼は神の似姿として、混頓とした人間社会に神的秩序のかげを与える、立法の仕事に従事しているのではないか。かくして、法がその究極的目標として目指すところのものは、宇宙全体がそれを目指すところのもの、『国家』における善のイデアである。それがいったい何であるかは、プラトン自身太陽の比喩を語っているのみである。

では法がその根柢において宇宙の法と一であるとしても、現実のポリスの法が直接目指すところのものは何であるか。よき立法者とは彼が未知を傾けて立法する国が、できるだけ強大であり、できるだけ富んでいることを意図すべきだとする大衆の主張 (742D) に反して、プラトンは国家衰亡の原因は力の欠如にあるのではなく、悪徳に、特にもっとも重要な事柄についての無知にあるとする。最大の無知とは、個人の心にお

ける理性と感性との不調和であり、国家における支配者と大衆との不調和である(688E-689C)。この故に、法の目指すところは国家をできるだけ一つにすること、すべての人間が同じものに喜びや悲しみを感じ、称賛や非難においても、できるかぎり一致するような国をつくりあげることである(739C-D)。『国家』における財産家族その他の共有制こそこの目的にもっとも適うところであるが、現実の国家においてそれが望めない以上、立法者は国家ができるだけ一つであることを目的としなければならない。このために立法者は公共の利益を個人の利益に優先させなければならない。なぜなら、公共の利益は国家を統合させるが、個人の利益は国家を解体させるから(855A-B)。しかしプラトンの意味するところは、個人の利益を国家の利益のために犠牲にし、個人を国家に埋没させることではない。国家は国民の集合であって、個人を越えた存在ではない。個人的利益より公共の利益を優先させることは、国家にも個人にも双方にとって、その方がより有益だと認められるからに他ならない。法が目指すところの公共の利益とは国民ができるだけ幸福になることであり(743C)、他方、国民の目指すところの徳は完全な国民たらんとすること(63E)であって、ポリスなき人間のそれではない。従って、人間の幸福はよく治められた国家においてのみ可能なのである。

以上述べたように法の目標は徳の完成にあるから、立法とは徳を目指しての国民の教育に他ならない。この故にプラトンは、一定の犯罪に対して一定の罰則を定めるだけの通常の法を軽蔑する。法は現実に行われた悪に対して罰を定めることであるよりも、悪を行なわないように国民を教育することである。これは医学の目的が単に病気を癒やすことにあるのではなく、できるだけ病人をつくらないようにすることにあるのと同様である。ここでプラトンは自由人の医者<sup>ヘレク</sup>と奴隷の医者との比喩を用いる。奴隷の医者は一人ひとりの病気について説明を与えることをせず、ただ患者から患者へと走りまわって治療する。これに対し、自由人の医者は病気をその根本から検査し、病気についてできるかぎりの説明を与える。もし前者が後者を見たら、患者は病気を直して貰うことを欲しているのに、あなた方は患者を医者に仕立てるつもりなのかと嘲笑するであらうとプラトンは言う(720A-E, 857C-E)。この二種類の医者の例と同様に、法にも二つの遣り方がある。単なる命令と説得によるそれとである。法は国民の教育であるとともに、墮落し易い人間の性向に制度的歯どめをかけ、複雑化する社会機構から生じるさまざまな問題にも対処しなければならないから、このために厳密な成文法の体系が整備されなければならない。この法の持つ二つの機能を果たすために、プラト



ンは強制的な命令を示す法の本文に対し、その法が何を意味し、何故そのような法が必要であるか、また何故それが正しいかを説明し、それによって個々の法を全体的目的に關聯づけるとともに、立法者から法を与えられる相手方が、その法の命じるところを心を開いてうけ入れ、納得するようになるための序文 *Prooimium* が必要であるとする (722B ~ 723E)。この序文は法体系全体についても、個々の法についても必要である。<sup>(6)</sup> 彼は立法のこの二つの遣り方を、結婚に関する法を例にとって実際に行ってみせる。彼は先ず普通の遣り方で、命令とそれに違反するものに対する刑罰を述べ、ついで命令と説得とを併用する遣り方を示し、結婚がわれわれ人間が永遠に参与するための義務であることを説明する (721A ~ D)。プラトンがこのように法の持つ教育と強制という二つの機能を法の序文と本文という形で劇然と區別したことは、法における教育的機能を重視したプラトンの意図とは別に、結果的には、嘗て道徳や慣習と未分化であった法から、命令としての実定法の体系の成立への大きな一歩となったのではないか。

プラトンにとって、法は単なる強制ではなく教育であるから、如何にして国民に法を守り、法を敬う氣風を植えつけるかが重要な問題になる。民衆の心に法に対する不信があれば、その法は定着し得ない。彼はこのことを、たとえば共同食事や同性愛に関する法を例にとって説明する (838E ~ 839D)。しかし、単に国民に法を守る氣風を植えつけることだけが重要なのではなく、法がもっともよく守られるためには、法そのものが守られるに値するものでなければならぬ。法を正しく保全する方策をたてることの方が、法を守る氣風を植えつけることよりも重要なのである (860D)。法の保全については後に述べるとして、先ず法への服従を国民に植えつけるための手段について一言しよう。それには二つの方法が考えられている。一は理性的説得の道であり、このための重要な方法として、いま述べた法に序文を附することが求められる。他は理性以外の手段に訴える道である。先の操り人形の比喩でも、法という思考の黄金の糸は、鋼鉄の糸のような強制力を持たないから、それに従わせるにはさまざまな補助手段が必要であると語られているが、この補助手段とは人間の非理性的部分に働きかけるさまざまな方法を指す。プラトンは生活習慣や遊び、歌、踊り、演劇等を通しての性格形成、殊に幼児期のそれを重視し、『法律』一、二、七巻は専らこれらの教育論である。それは『國家』二、三巻における初等教育の記述に対応するが、より一層詳細をきわめる。『國家』においては、国民は生産に従事する階級と支配、防衛に従事する階級とに分けられ、そこで述べられている初等教育は後者のみを対象とするものであるが、『法律』においては、この階級の區別は放棄され、そこで記述されている教育は、国民全体を対象とするものであるから、より一層非理性的手段が重視されている。もちろん

『法律』においても、人間性来の素質の違いが無視されているわけではなく、将来国の指導者たるべき素質を持った人びとは、他から区別されて特別な訓練をうけるのであり、国家の指導者と一般国民とをプラトンは縦糸と横糸とにたとえ(734E-735A)、両者はその素質においてすでに本質的に異なっているとされているが、『法律』では一般大衆の教育により多くの関心がよせられており、従ってそこでの教育はより一層非理性的手段に訴えるものが多い。人間心理の動きについての充分な客観的知識にもとづいて、人間を導く(ときには操つる)ことを組織的に行なうことを提案したのは、プラトンををもって嚆矢と言えよう。

ところで、法は教育であるが、それはよき人びとに対してつくられたものであるとともに、悪に走る人びとに対してもつくられているから、後者の場合には刑罰を伴わざるを得ない。刑罰を伴う強制は止むを得ざる必要であって、国家が刑法を持たざるを得ないということは、プラトンの言うように恥ずべきことではあるが、しかし他面、刑法が成り立つ背後には、人間にとって徳が教えられうるものであることが前提されている。人間にとって徳が教えられ得るものであるのに、彼がそれをなさず、悪に走るが故に、刑罰が正当化されるのであって、たとえ嵐が猛り狂って船を覆しても、それは刑罰の対象にはなり得ない。刑罰は復讐ではない。人は誰でも他人に損害を与えたとき、それに見合った額の賠償を支払うべきであるが、ある場合には、その上さらに、加害者は刑罰をうけなければならぬ。刑罰を科せられるのは彼が悪をなしたからではなく、つまりなされた悪に対する報復措置としてではなく、悪をなした本人あるいはそれを見た他の人びとが将来悪を憎むようになるためである。何故なら、一度なされてしまったことは、なされなかったことにすることはできないのであるから(CRIME / GUILT)。そして矯正不可能とみなされた者は社会から取り除かれる。それは彼自身にとって、それ以上の悪を行なわせないためであり、また他人にとって彼らが悪をなさないようにとのみせしめであると同時に、国家から悪しき者を取り除くためでもある(CRIME)。

しかし刑法を認めることは、人は自ら欲して悪をなすものではないという、かのソクラテスの根本命題と矛盾するものではないか。プラトンは晩年に至って、ソクラテスの命題を放棄したのであろうか。否、この点については、『法律』を執筆していた時点においても、プラトンの考え方は少しも変わっていない。悪をなす者は何びとも、自ら欲して悪をなすのではない。何故なら、何びとも大いなる悪を自ら求めて手にいれることはあり得ないから。況や人間の持つものの中でもっとも貴重なものである魂の中に、不正という最大の悪を自らすすんで取りいれ、生涯

それがかえて生きるといふようなことはあり得ない(731C)。しかしこの言葉のように、プラトンにソクラテスの命題が生きつづけているならば、それと刑法の根柢とは矛盾するのではないか。刑法は人間の行なう悪しき行為を、意図的と非意図的とに分けるところに成り立つ。後者は補償の対象ではあるが、刑罰の対象となるのは前者のみである。従って、もしソクラテスの命題のように、すべての悪しき行為が非意図的であるとしたら、刑法は成り立ち得なくなる。この矛盾に対して、プラトンは如何に答えているのであろうか。彼は不正行為 *adikētia* と損害 *blabē* とを区別し、すべての不正行為は、ソクラテスの言うように非意図的であるとする。他方、人が他人に損害を与える場合、その損害を与える行為のあるものは非意図的であり、あるものは意図的である。世間一般の用語では、損害を与える行為と不正行為を同一視して、不正行為に意図的なものと非意図的なものがあるというが、これは誤りである。何故なら、他人に損害をではなく利益を与える行為が、不正であることもあるのだから。従って、誰かが意図的に他人に害を与えたとき、彼は意図的に不正をなしたと言ってはならない。立法者の仕事は二つあり、一方では、彼は与えた損害を償わせ、他方では、損害を与える行為が行為者の不正にもとづいてなされた場合には、不正は魂における病氣であるから、不正行為をなすものを教えたり、強制したりして、彼がふたたびそのような行為を行なわないか、あるいは少なくとも行なうことが以前よりもより少なくなるようにさせなければならない。では、人は自ら欲して不正をなすものでないならば、人が不正行為をなす原因とは何なのか。プラトンは激情と快楽と無知——単純な無知と無知であるのに自分は知者であると思っている二重の無知——とをあげる。これらの三つの動機は、人が自分の意志の望む方向へと向って進んでいるときに、それとは反対の方向へとその人を引っばってゆくものである。これらの三つの力によって引き起こされる不正行為が、刑法の対象となる犯罪である。このようにみることによって、プラトンは、人は自ら欲して悪をなすものではないというソクラテスの命題を救い、同時に意図的行為と非意図的行為との区別の上にのみ成り立つ、刑法の基礎づけを可能にする。

さて、先に法を守る最善の方法は、国民に法を守る気風を植えつけることよりも、法そのものを守られるに価するものとするところであると言った。法の保全とは単に既存の法を墨守することではなく、立法者の精神をうけつぎ、法がその本来のあり方から逸脱することのないように監視するとともに、絶えざる研究を重ね、現実の変化に対応しつつ、必要に応じて法を改善してゆくことである。プラトンは『法律』の最後において、夜明け前の会議を設置し、これを国家全体のいわば錨として、法の保全の役割を荷うものとした。この会議の構成員およびその目的につ

いては既に述べたことがあるから、ここでは繰返さない。<sup>(1)</sup> プラトンが法律の絶えざる研究と改正の必要を認めていたことは、彼が立法の仕事を描きのそれに比べているところからも明らかである。絵描きの仕事には、これで終りということがないようにみえるのであって、彼らはもうこれ以上美しくなり得ないというところまで、描き直して飽くことを知らない。もし誰かがこの上なく美しい絵を描き、しかも自分の死後その絵がだんだん悪くなってゆくのではなく、ますます良くなってゆくようにと願うならば、彼は後継者を残し、その後継者が、時の経つにつれて傷んでゆく部分を修復し、また最初の絵描きが未熟さの故に遺り残した仕事を補って、いつそう完成に近づけてゆく。立法者の仕事もこれと同じで、彼は最初に、法を厳密さにおいてできるだけ欠けるところのないように書こうとするが、それを実行に移してみると、自分の築いた国家の体制と秩序とがより善くなってゆくためには、後に続く者の手によって改善されなければならない、多くの欠陥があることに気付くのである(769A~E)。立法の仕事が最初の立法者において終るものではなく、第二、第三の立法者によって、その精神が受け継がれてゆくべきことは既に『国家』の中の、国の中には国制に関して、立法者が法の制定にあたって持っているのと同じロゴスを持っている何らかの人びとが、つねに存在していなければならない(『国家』497C~D)という言葉にも示されている。

以上の考察から、プラトンが『法律』において一切の変化を否定している、という非難が不当であることは明らかである。法は完成の暁には一切を不動のものとして、何一つ動かしてはいけない(772C)、人間がある法の下に育てられ、神的な幸運に恵まれて、その法が長い年月のあいだ変化することなく、その結果、何びとも、法が現在と違ったあり方をした時代の記憶もなければ、そのようなことを人から聞いたこともないならば、人は全霊をもって法を敬い、いったん制定されたものを、どれ一つであれ動かすことを恐れる(788B)などという言葉をそれだけ取ってみれば、プラトンは法の変化をすべて拒否しているようにみえるかもしれない。そしてこの類いの言葉が『法律』にしばしばあらわれていることは事実である。しかし、それがプラトンの真意でないことは、彼が夜明け前の会議の制定をもって、彼の立法の仕事の最後の仕上げ(968A~B)としている点からも明らかである。従って完成の暁にはという言葉は、変化の否定とみるよりも、むしろ完成に至るまでの過程に重点をおいたものとみるべきであろう。

次にプラトン解釈においてしばしば問題とされる法の支配と哲学の支配との関係を考察する。この点については、以下の三つの場合が考えら

れる。

一、プラトンは『国家』において、法にとられない哲学の支配を説き、『法律』において、哲学の支配が現実には不可能なることを悟って、次善の策としての法の支配を、可能な最善の方策として選んだ。

二、プラトンは『国家』において、哲学の支配と法の支配とを対立させ、最善の策として前者を取ったが、『法律』において、法を哲学に対立させる立場を捨て、法を知性の産物とすることによって、法と哲学とを両立し得るもの、両立すべきものとした。

三、プラトンは始めから、法と哲学とを対立するものとしては考えていないのであって、『国家』における哲学の支配は、法を通じての哲学の支配であり、『法律』における法の支配は、哲学的知識に導かれた法の支配である。哲学は法にとって——むしろあるべき法にとつてと言うべきであろうが——不可欠であり、哲学なくして法の支配は不可能である。ただ法が現実の国家の法として成文化されるとき、両者のあいだに対立が生じ得るのである。しかし国家の法はあるべき法の模倣であり、あるべき法と具体的諸法律とが、同じ法という言葉で無差別に表現されているところに、曖昧さが生じるのである。

以上三つの見解のうち、第三のものを正しいとする理由を明らかにすることによって、第一、第二のものを斥ける理由も、自ら明らかになるであろう。

先ず第一に、『国家』においてプラトンは法の支配を決して否定してはいない。『国家』において建設される国は法治国である。ソクラテスは自らを、われわれ立法者と言ひ(530C)、その国の支配者たちは、法の守護者とよばれる(421A, 504C)。またこの国の重要な制度と関聯して、法 νόμος (380C, 383C, 453D)、立法 νόμοθεσία (427B, 502C)、立法する νομοθεσῶν (398B, 409E, 417B) という言葉がしばしば用いられている。然らば、哲学の支配と法の支配とは同じものであろうか。哲学の支配が法を通してしかあり得ず、逆に法の支配が正しい意味での法の支配であるためには、哲学的知識に導かれるものでなければならぬとしても、両者は直ちに同じではない。哲学は自らのうちに神的なる思慮を持つが、制定された法は、プラトンの言う医者の方箋のようなもので、われわれがそれだけに頼るならば、それは多くの欠陥を持つと言わなければならない。

この点に關聯して、『政治家』における法批判を考察しなければならない。一国の統治の理想的形態は法が強力であるのではなく、真に統治

の知識を具えた人間が強力であることである。この場合支配者が、説得によるか、強制によるか、成文法に従うか、成文法を無視するか、ということは問題ではなく、彼が真に統治の知識をもって支配することこそ問題なのである（『政治家』293A, 296D～E）。何故なら、法は万人に對して、それぞれにもっとも善きもの、もっとも正しいものを、同時に命令することはできないからである（291A～B）。各人の性格経験遭遇する状況は千差万別であって、あらゆる場合、あらゆる人間に對応し得るような、一つの不動な規則などというものはあり得ない。しかるに、法は複雑な人間生活を、自らの単純さをもって支配しようとする。それは何びとにも、何ひとつ自分の単一な命令に反することを行なうことを許さない、愚鈍で強情な人間のようなもので、彼は事情が変り、新しい指示がより適當になっても、自分の与えた命令を変えることはおろか、質問をすることすら許さないのである（291B～C）。法がこのような固有の欠陥を持つ以上、法の運用にあたっては、それを個々の場合に適合させ、流動する状況の変化に對応する柔軟性を持たせるために、さまざまな工夫がなされなければならない。『法律』においては、これらについての詳細な考察がなされているが、『政治家』において、プラトンはその点に一切触れていない。むしろ彼の筆は、専ら墮落した民主制下における、いわゆる法の支配と呼ばれるものの実態を抉りだすことに集中しているかに見える。たしかに法なき世界において人間は獸と異ならない。医者金は金を貰って患者に毒を盛るかもしれないし、船員は金品を奪うために乗客を海に投げこむかもしれない。しかしこのような悪徳医者や悪徳船員から身を守るために、大衆が会議を召集して、医療や航海に関して彼らが決議したことを、成文化して法とし、あるいは不文の仕来たりとして、以後一切の医療や航海はこれに従って行なわれるべしとしたらどうなるのか。さらにそれらの法を施行すべき役人を毎年籤で決め、しかもこうして選ばれた役人たちは、一年の任期を終えると、やはり籤によって選ばれた裁判官たちによる審査をうけ、その上誰でも欲する者は、これらの役人が法の条文に準拠しなかったと言って告発することができ、告発された者は、裁判によって有罪とされれば処刑され、あまつさえ、法律の条文を無視して医学や航海術を研究する者があれば、彼は空理空論を弄ぶ輩として嘲けられ、青年を墮落させる者として裁判にかけられ、この場合も、もし法の条文に些かでも外れたことを口にしたことが発見されれば、極刑に処せられる（298A～299E）。これが正に、当時の法の支配と呼ばれるものの実情であった。しかし、プラトンのカリカチュアがどれほど辛辣であっても、なおかつこのような法の支配ですら、彼は、それが独裁に勝ることを、法の支配は少なくとも無知や個人的及至党派の利益にもとづく支配から、国民の権利を守るという意味で、有効な手段でありうることを強調する。たとえ知識が法によって規制され、しかもこの法を施行する役人が選挙や籤で選ばれると

しても、こうして選ばれた人間が、法に何らの顧慮をも払わずに、何の知識もないのに、利害や情実から成文法を犯すならば、その害悪たるやさらに大きいのである。法は、たとえそれが素人によって決議されたものであっても、何といっても経験の集積であって、無知な人間が法を犯す場合の災害の方が、遙かに大きいのである（300A—C）。

以上見るように、『政治家』における、法の支配に対する批判の大半は、法の支配そのものではなく、法の支配の現状に向けられたものであるが、それとは別に、法そのものに本来的な問題点として指摘されているものは、以下の二点である。

一、法はもともと、一般的、固定的な規則を与えるものであって、流動する現実の世界の、千差万別な個個の場合への適用にあたって、その固定性を柔げ、個個の場合と法の一般的規則とのあいだのへだたりを、埋めるための工夫が不可欠である。

二、法はたとえその制定にあたって、識者たちの衆知を集め、経験を積み重ね、力の限りを尽くして制定されたものであっても、つくられた法はある特定の状況の下における、あるべき法の模倣であって、決して完全なものではあり得ない。この不完全な法を不動なものとして絶対視するところに、知識を伴わない法の支配の弊害があるのであって、従って、法はつねに知識によって吟味され、究極的目標たる徳を目指して改善されてゆくべく、その可能性が開かれていなければならない。これこそ最初の立法者の精神を生かし、法を保全する最上の方策なのである。

『法律』において、プラトンは以上の二点、すなわち法の運用と法の研究とについて、周到な配慮をしている。第二の点については、夜明け前の会議の設置がそれであり、これについては既に述べた。此処では第一の、法の運用上の不備を防ぐための配慮についてのみ述べよう。この問題は表裏をなす二つの面を持つ。一は『政治家』で特に強調されている、法の一般性、固定性の問題であり、もう一つは法の解釈運用にあたって入りこむ、主観性、党派性を如何にして防ぐかの問題である。その対策は以下の三点に分けて考えられる。

#### 一、裁判制度の改革

#### 二、行政権の濫用に対する防止策

#### 三、法の成文化と不文法の役割

第一、第二の点については前掲の論文で既に述べたので、ここでは第三の点のみを取り上げる。法とはもともと、何が正しいかということに

ついでに伝統的慣習であり、法の持つ強制力は慣習の持つ強制力であった。小集団が祖先伝来の掟や風習に従って生活している限りは、成文法の必要はないが、いくつかの異った集団が集って、一つの共同体を営むようになると、それぞれの異った風俗習慣を比較検討して、すべてに共通な一つの法をつくるが必要となる(881C~D)。こうして、不文律としての法が、国家の法として道徳から分化し、国法の持つ強制力が国家権力によって支えられるようになる。国民を支配者の恣意から守るために、法の成文化が必要となる。『法律』において、プラトンが法による規制の対象としている事柄の多くは、たとえば子供の教育や、個人生活に関するさまざまな仕来りのように、今日のわれわれの眼からみれば、法の規制外に属する。『法律』の国のように、伝統を持たない、新しく建設された国においては、細部の規則に至るまで法によって規制する必要があるという、特殊事情を考慮にいれても、なおかつこのことは否定できない。

このようにプラトンは、一方において法の成文化の必要を、われわれの眼からみれば過度にまで強調するとともに、他方において、成文法の間隙を埋めるものとしての、書かれざる法、父祖伝来の掟の意義を重視する。一般に書かれざる法と呼ばれるものは、大別して次の二つに分けることができる。

一、神的起元を持ち、すべての人間、すべての国において妥当する、永遠にして普遍的道德法を意味し、これはそれぞれの国家において、人為的に定められた実定法を越えた權威を持ち、実定法を基礎づけるものであるとともに、ときにはソホクレスのアンチゴネ(500以下)に見られるように、その權威によって国法に対する挑戦がなされる。

二、不文法はまた、成文化する必要のない、もしくは成文化しきれない、細々とした生活の諸規制を意味する。プラトンはこれを、社会生活において成文法をもって充たすことのできない間隙を埋めるもの、社会を結び紐帯として重視する。それは既に成文化され、公布されている法律と、将来成文化されるであろう法律との中間にある、祖先伝来の古い掟であり、それが立派に定められ、慣習となるならば、成文法を安全に包み護る役をするが、もしそれが、誤って正しい道から外れると、ちょうど大工の建てた建物の支柱が中心から外れると、建物全体を崩壊させるように、社会全体を崩壊させる(783A~D)。家庭生活における細々した規則や人間同士のある種の関係は、刑罰を伴う法によって規制するよりも非難と賞讃によって好ましい習慣を人びとの心に植えつけることによって導く方が、遙かに望ましいのである。またあまり細々したことを法によって規制することは、法を破る習慣をつけることになり、それは法全体を守れなくなる危険を招くからでもある(788A~B, 822D~



以上『法律』を中心としてプラトンの法理論の要を述べた。プラトンが自ら老人の知的遊びと呼んでいる、この一見いかにも雑然とした長いおしゃべりの中に、もしわれわれが、彼の何げない言葉の中にも彼の深い洞察を読みとるだけの注意深さと忍耐とを持つならば、われわれは法の領域においても、プラトン以後の哲学はプラトンの關注に過ぎない<sup>(5)</sup>という言葉の正しさを認めずにはいられないであろう。法とは何かと問うことに始まり、現代の法理論のほとんどすべての問題点が、プラトンにおいて既に出っくしているのではないだろうか。わたくし自身、この歴大な書物のほんの表面を擦っただけで、その無限の宝庫から、いったいどれだけのものを汲み取り得たのか心細い限りである。しかもなお、『法律』を読んでいるときに、わたくしは自分の心の中に一つの疑問が次第に形をなくしてゆくのを禁じ得なかった。それは神と自由の問題である。プラトンは法の權威を道徳に、道徳の權威を神に求めた。人間が万物の尺度であるとするプロタゴラス説を覆して、神こそ万物の尺度であるとした。神において自由と必然とは一になる。『法律』の国が、神の国の地上における実現をその究極の理想とするとき、それは人間の自由を神の祭壇に捧げざるを得なかったのではないか。『法律』の国の建設にあたって、行政司法制度に関して、あれほど国民の自由を守るための周至な配慮を怠らなかったその同じプラトンが、思想芸術宗教教育等における一切の活動を、その大綱においては直接法によって規定し、細則についても法の定めるところに従って選ばれた役人たちの、厳重な管理の下においていることは、何を意味するのであろうか。たとえプラトンの場合、自由にとっての最大の障害が自由の過剰にあり、無秩序が独裁に転ずる危険を彼が誰よりも痛切に感じていたとしても、また彼が、すべての悪はまず人間の魂の中に始まるということを確認していたとしても、なおかつ、この『法律』の国における国家統制は説明し切れない。われわれはプラトンの、自由の否定とも思えるこれらの主張を、自由を守るための自由の抑制として、肯定すべきなのだろうか。国家とは自由なもの、知性を具えたもの、自らのうちに友愛を保持するものでなければならぬという、たびたび繰返される言葉(693B, 694B, 701D)のフランス革命のモットーに奇妙に類似した言葉はプラトンの意図が奈辺にあるかを示していると言えるだろうか。

しかし、命令するのは神である、もし何らかの仕方を実際に命令が神から来ることが可能ならば。だがそれが不可能な現状では、国家と国民に最善と信じることを述べ、ただひとり理性の導きのみに従う人間が必要なのだとプラトンは言う(895C)。この人間が自ら最善と信じることを

ろを神の命令だとするとき、そこには、大きな危険が潜んでいるのではないか。思想統制の根拠が神におかれるとき、人間はそれから逃れる術を持たない。国民を独裁から守ることを目的とした法が、法の独裁へと転じ、われわれの魂にまで絶対の権力を持つ危険に対して、何がなされるべきなのか、また何がなされ得るのか。

いったい『法律』における神を、われわれはどのように理解したらよいのか。それは『国家』における善のイデアとどのような関係にあるのか。プラトンは、晩年になるほど、神について語ることが多くなるが、このことはプラトン哲学にとってどのような意味を持つのか。プラトンにおける自由の問題は政治の次元における自由にとどまらず、より一層神に対する人間の自由という次元において問われなければならない。

(1) 以下『法律』からの引用は頁数のみを記す。

(2) 『ミノス』の真偽性については、G. R. Morrow, *Plato's Cretan City* pp. 35~39 参照。大方の見解と違って『ミノス』をプラトンの真作なりとし、その執筆年代を『法律』と同じ頃と推定して、プラトンは始めそれを『法律』の序文とするつもりで書き始めたが、途中でこの意図を放棄したということも考えられるとするモローの見解は必ずしも説得力を持たないが、これを偽作とする諸見解も決定的根拠を持たない。『ミノス』で述べられている法についての考え方は『法律』のそれと大筋において一致するから、『ミノス』を少なくとも内容的にはプラトンの法的思想理解の手がかりとして用いることは許されるであろう。

(3) 法全体についての序文としては、715E~718A, 726A~731Eの新しい入植者たちへの呼びかけの言葉がそれであり、そこで人間の、神々に対し、人間に対し、自己に対する義務が語られ、さらに人間生活全般にわたっての基本的道徳が示される。特定の法律についての序文の例としては、土地所有について 741A~E 結婚について 772E~773C 符號について 833D~834 神殿荒しについて 851B~C 殺人について 870A~E 商売について 916B~E 等がある。第十巻のいわゆるプラトンの神学と呼ばれるものも無神論に関する法律の序文である 861~907D。

(4) 筑波大学哲学・思想学系論集昭和五十一年度、マダネシアの國（その一）なおこの会議の構成員について次の点を補足する。951Dの國家から榮譽を授けられた神官たち *τῶν θεῶν τῶν ἐν ἀναστάσει ἐκκλησίῳν* at 951Aの國家から榮譽を授けられた者たち全部 *τῶν ἐκκλησίῳν ἐκκλησίῳν* とあるのは誰を意味するのであるか。これは監査官のみを指すのか。それとも國家から榮譽をうけた神官は監査官以外にもあるのか。もしあるとすればそれはどのような役職の人びとであるのか。そして彼らもこの会議の構成員に含まれるのか。また951Dで榮譽を授けられた者たち全部と言っている

るのは 951D の神官たちという言葉が単に省略されているのであって、この二つの箇所は同じ人びとを指しているのか。それとも神官以外にも栄誉をうける人々があって、951A はそれらの人びとをも含めているのか。右の疑問に答えるためには此処でいうアリストテアが何であるかが明らかにされなければならぬ。『法律』におけるアリストテアという語の使用例を見ると、軍隊における恩賞を意味する場合 829C, 942D, 943B, C と、一般に役人に与えられた栄誉を意味する場合 935C, 952D とがあり、その他の箇所はすべて明らかに監査官にかかわっている 919E, 946B, E, 948A, 951D, 961A。このうちアリストテアが軍隊での恩賞や一般に役人に与えられるそれを指す場合には、それらの内容は特に限定されてはいない。問題は「国家によってアリストテアをさすけられた者」という表現が直ちに監査官を意味するかということであるが、このような表現が監査官以外の神官、もしくは監査官をも含めた神官以外の者を指すのに用いられている例が一つもみられないところから、夜明け前の会議の構成員として右にあげた二例はいずれも監査官のみを意味するものと理解してよいであろう。なお監査官に与えられる特別のアリストテアの内容については 946E ~ 947E に詳しく述べられている。

(5) A. N. Whitehead, *Process and Reality*, p. 63